会　報
Vol.24　No.1　通巻 135 発行日　2022.03.13

Der Wind
（風）

湘南日独協会
Japanisch-Deutsche Gesellschaft in Shonan
事務局:〒251-0025 藤沢市鵠沼石上 1－1－1
江ノ電第2ビル7F
Tel:0466-26-3028 Fax:0466-27-5091
E-mail:jdgshonan.official@gmail.com http : //jdg-shonan.ciao.jp/

日独交流160周年
Jahre Freundschaft
Deutschland－Japan

日独交流の今後を考える

湘南日独協会 会長　大久保　明

日独交流160周年が新型コロナの影響で、日独共に残念ながら少々盛り上がりに欠けているなか、11月例会では西山忠壬氏(当協会顧問)を迎え講演会を開催しました。氏は私が日頃日独協会の活動の中で親しくさせて頂いている尊敬する先輩ですので、西山さんと呼ばせていただきます。

西山さんの母方の祖父は、旧制三高でドイツ語を教えておられたドイツ人です。西山さんはドイツとの産業機械・資材を取引している会社の経営に携わる一方、日独協会の活動に長く深く関与し、その傍ら数々のボランティア活動をしておられます。その縁で、若くして亡くなられた髭の殿下で人気のあった三笠宮様とも親しく、清水寺管主ともご厚誼があり、日本酒の会である酒道連盟でも重きをなすなどの方ですが、日頃湘南日独協会の例会などでお会いすると、常に笑顔を絶やさないダジャレのお好きな紳士です。この紳士の謎を解こうと、講師との対談形式を取り入れての講演をお願いしました。90歳を越えられたにも拘わらず、記憶力衰えず、約90分を休憩も無し水も飲まれず、質問にもお答えいただきました。

西山さんの母上はドイツ人の祖父と日本人の母との間に生まれ、丙午生まれの為、養女として千葉県で育ち、山口県出身の父上と結婚し、西山さんが生れた、それも午年であった。父の故郷である山口県下関で育ったが少年期は茅ヶ崎に住み、ロシア生まれのドイツ人の音楽家で戦後活躍する日本人音楽家を育てた、レオニード・クロイツァー氏宅に身を寄せていた時期もある。クロイツァー氏は戦後活躍する多くの日本人音楽家を育てた方であり、有名なピアニストの走り使いをしたこともある。大学卒業後は母上の弟の会社「K・ブラッシュ商会」へ入社の運びとなる。仕事は主にドイツからの産業機械の輸入で、研修も兼ねヘキストの子会社へ1年半余滞在の経験もある。

会社の経営と同時に日独協会の活動に、日本在住のドイツ人と共に参加され、日独協会(東京)の役員として活動され、ブラッシュさんの「禅」の研究や遺された多くの文化財のコレクションの管理などにも尽力されています。長年日独間を越えての各種の活動をされて、90歳を越えた今日湘南日独協会の顧問として運営にも積極的なご支援を頂いております。

日独交流が160年前に始まって以来、日本とドイツとの関係は着実に強く太く発展してきました。ドイツは日本にとって世界への窓口の一つとしてその大きな役割を果たしてくれました。従って、産業・文化の交流も盛んでした。私たちは長年ドイツ人の考え方は日本人とよく似ている、などと特別の友人のごとく思っていました。日本にとってドイツは地理的には大変遠方に位置する国でありながら、隣国のような存在でありました。しかし、欧州ではEUが発足し、ドイツはその有力な構成国の一つとなり、日本もアジアの近隣国の台頭により、往時の勢いはありません。世界はまさに流動的です。このような情勢の中での民間外交は大きな役割を担っていると思います。

西山さんのお話を聞きながら、日独の多くの諸先輩方が残された日独交流の絆が細く弱くならないように努めたいと思いました。

西山さんと清水寺の
管主より頂いた水墨画

兼松藍子氏講演

「浮世絵を楽しむための基礎知識」を聴いて

会員　島　新

2022年1月23日(日)、湘南日独協会主催の例会で、講演会「浮世絵を楽しむための基礎知識」を聴いた。講師の兼松藍子氏は、早稲田大学大学院を修了され、現在は公益財団法人大谷美術館の学芸員を務められている。レジメと画像で説明をされ、非常に分かりやすかった。ここに全ての画像を再現できないのが残念だが、主に興味を引いた内容は以下のとおりである。

会場の様子

1. 戦国時代以前は、仏教の来世を重んじる思想より、現世＝憂き世という考えが主流であった。これが、江戸時代の1680年代以降になると、現世＝浮世＝「生きているこの時代を楽しむ」という考えが主流となり、「楽しい現世の様子を描いた絵」→浮世絵となったと考えられている。

2. 浮世絵発展の流れを見ると、1670年代に浮世絵が生まれ、この頃は墨一色のみの「墨摺絵」であった。これが、筆による着色が始まり、次第に多色刷が可能になり、錦絵が生まれる。紙の位置決めをする「見当」という版木の構造の改良により、より精巧な多色刷りが可能となったからである。

1770年代以降になると、浮世絵の発展期を迎え、似顔画などが発展し、さらに浮世絵の隆盛期を迎える。有名な写楽の役者絵や、喜多川歌麿の美人画などは、この頃のものである。

1800年代に入り、歌川派が隆盛を極めてくる。幕末期に向かい、浮世絵の爛熟期となり、彫り、摺りの技術は頂点になる。

明治以降になると、化学合成された染料が使われるようになり、より鮮やかな色彩が可能となった。

3. 浮世絵は、一人の絵師だけで作られるのでなく、版元、絵師、彫師、摺師というプロ集団による一大分業、共同制作体制で作られ販売された。

版木には、山桜の木がつかわれた。硬いので、繊細な線を彫ることが出来、摺りを重ねても耐久性があるからだ。ちなみに、彫師は、1mm幅の中に、4本の線を摺り込むための凹凸を彫り込むことができた。これで、女性の髪の毛の一本一本が等間隔で摺り出された美人画が可能となっている。

4. 絵師は権力者や富裕な町人によって庇護されていたが、浮世絵は、庶民によって支えられた。浮世絵の価格はピンキリで、一般的には大判浮世絵一枚が、かけそば一杯分、16文より少しする程度であった。

5. 19世紀頃、日本文化がヨーロッパにおいて流行し、特に浮世絵は、印象派に大きな影響を与えた。

浮世絵と藤沢、江ノ島

藤沢宿、遊行寺、江ノ島などを題材にした浮世絵は多い。なかでも世界的に有名な葛飾北斎の「冨嶽三十六景　神奈川沖浪裏」がある。辻堂駅を降りてすぐのところに、「藤沢浮世絵館」が開館され、藤沢、江の島にかかわる浮世絵が沢山楽しめるとのことである。

今回の講演を聴いて、昔ボストン美術館で初めて大量の浮世絵を見た時の感動や、ロンドンで、「Floating World」の看板を見て入ったら、浮世絵コレクションの大展覧会であった事などを懐かしく思い出した。

本日の講演をもっと昔に聴いていたら、浮世絵や、印象派の絵をもっとよく楽しめたのだろうにと思った。

葛飾北斎 「冨嶽三十六景 神奈川沖浪裏」

「見て聴いて楽しむ音楽史」を聴いて私も楽しむ

川上　久美子

古楽器の音楽

前半は、弦、木管、金管の各古楽器のご説明をお聞きしました。それぞれの楽器の新旧の比較も実際の音源を使ってご説明受けました。私は中でもオーボエの古楽器Wiener Oboeの音色に魅せられました。

随分昔(2006)の講師(左)と筆者(右)

後半は、Monteverdi 作曲のVespro della Beata Vergineを鑑賞しました。この曲の出版時期は、日本では江戸時代の始め、林羅山や織田有楽斎が文化を担っていた頃です。この曲の先唱を聴いた時は、同じ高音が続くパートが長く、それよりは音程が低いのですが、仏教の声明（しょうみょう）を聴いたときのことを思い出しました。ヴェネツィアのサンマルコ寺院の楽長だったMonteverdiの、かの広大な寺院空間で演奏するための複合唱形式のこの曲を私は初めて聴きましたが、テノール独唱のあとから、歌詞の韻を踏んでエコーが歌うおもしろさにすっかり魅了されました。歌詞は、ラテン語。実は私の夢は語学の達人になることでした。学生時代から数年は、ドイツ語を学びましたが、社会人として仕事に没頭し中断、退職後にようやくイタリア語とスペイン語を勉強中です。この日のラテン語歌詞をみて、イタリア語の元だということがよくわかりました。また、楽曲の中で大型のリュート奏者が複数登場しましたが、楽器の長い弦は一定音しか用意できないので、他の音程を要求されるときには、各音程に合わせた数の楽器と奏者が必要とのこと、興味深いことでした。

高橋講師が、この曲の古い輸入盤の楽譜を持参されましたが、彼が社会人となりたての頃に大枚をはたいて購入されたものだそうです。彼の深い音楽愛の表れの一つと思いました。

Mozartの歌劇

冒頭、舞台上で声楽を使う音楽の分類をお聞きし、これまでは一口に「歌劇」と括っておりましたが、数種類に分けられることを知りました。Mozartは、その種の音楽を21曲残しており、今回はドイツ語の歌芝居と分類されるZAIDE、及び歌劇「魔笛」の一部を、さらに、実際には３時間余りに及ぶ「フィガロの結婚」を、1時間弱にまとめて画面を観ながらお話くださいました。今回はミラノ・スカラ座での録画で、高橋講師のご説明どおり、ユニークな演出が随所にみてとれました。舞台装置は簡略化され、伯爵邸の庭で人々が集う場面では、事務用のスチール製折りたたみ椅子がセットされ、登場人物の激しい動きにより、倒れたら大きな音がしそうだと気が気ではありませんでした。また、効果音を出す時に、わざわざ所謂黒子（今回は白い服を着用）が登場したり、と、これまで抱いていた歌劇とは、ひと味もふた味も違うものでした。歌い手の素晴らしい声、演技に加えて、興味深い作品を観ることが出来ました。

会場の様子

劇中の独唱曲「この悩みは」は、高校時代の音楽の授業で習いましたので、思わず口ずさみたくなりました。帰宅後、教科書では唯一手元に残した「音楽」を開いてみました。すでに頁は茶色に変色していますが、今でも様々な楽譜、音楽史と理論は、当時の書き込みと共に楽しいです。早速、曲を見つけ、歌詞はイタリア語で書かれており、その下に和訳も表記されていたのは、驚きでした。しかも、イタリア語の特別な発音の下に、カタカナで読み方を鉛筆で自分で加筆していました。

毎回、高橋講師のお話は音楽への情熱が聞き手の私にも伝わり、本当に興味深く豊かな時間となっております。感謝と共に、これからも楽しみにしております。

会員　高橋　善彦

今回はピアノについての話です。ピアノは、弦を叩いて音を出し、鍵盤の弾き方で、強弱を区別出来ます。

Bartolomeo Cristofori di Francesco

1700年頃、フィレンツェのチェンバロ製作家、バルトロメオ・クリストフォリ (Bartolomeo Cristofori di Francesco, 1655 – 1731) が考案しています。それまでのチェンバロは弦を鳥の羽で「はじく」仕組みで、鍵盤の弾き方で強弱を弾き分けることが出来ません。クリストフォリの考案した楽器を “un cimbalo di cipresso di piano e forte, 優しく、また大きく鳴る鍵盤楽器” と呼んでいます。この呼び名から、pianoforte もしくは fortepianoと省略し、単にPianoと呼びます。

Bartolomeo Cristofori

一般的にこの時代のピアノをFortepianoと呼び、現代のピアノをPianoforteもしくはPiano、Modern pianoと呼んで区別しています。

左の写真は1805年頃のワルターの楽器を復元したFortepianoです。この時期のFortepianoの収納箱は、まだ、チェンバロと変わりません。音を出す仕組みにハンマーを採用し、強弱を付けることが出来ますが、音色は似ています。

SilbermannのFortepiano

ドイツ語圏では、1730年頃からクリストフォリの設計に基づき、フライベルクのオルガン製作者ゴットフリート・ジルバーマン (Gottfried Silbermann, 1683 – 1753) がfortepianoの製作を始めています。J.S.Bachが、1736年と1747年にシルバーマンの楽器を評価しています。この時期のハンマー機構を持つピアノはチェンバロに比べると複雑な構造で、まだ、高価な楽器です。一般に普及していません。クリストフォリもジルバーマンも、王室からの支援を受けて楽器の発展にあたっています。

ジルバーマンはダンパーペダルの原型を作っています。ダンパーは、鍵盤から指を放した時に音が切れるように弦を押さえるものですが、弦を押さえている全てのダンパーを持ち上げると、弦が自由に振動し音が伸びます。ジルバーマンは、手で操作する「つまみ」を用意しています。これが、後のMozartの時代、古典派の時代に、膝で操作するレバーとなり、やがてペダルで操作するようになります。

ジルバーマンの後を引き継ぎ、ウィーンを中心にしてピアノ製作家はクリストフォリのハンマー機構を簡潔な構造に改良しています。この改良で、楽器製作が容易になり、スクエア・ピアノに用いて普及します。

スクエア
ピアノ
ポーランド
ビエルスコ
ビャワ
博物館

Stein / Walter によるウィーン方式

ジルバーマンの弟子、アウクスブルクのヨハン・アンドレアス・シュタイン(Johann Andreas Stein, 1728 – 1792)は、ハンマー機構を改良し軽くします。ウィーンで19世紀半ばまで広く用いられ、**ウィーン方式** (Viennese action)と呼びます。ウィーン方式は、奏者のタッチに敏感に反応し、奏者は微妙なタッチが要求されます。ウィーンの製作家、アントン・ワルター (Anton Walter, 1752 – 1826)は、シュタインの方式を更に力強い音が出るように改良しています。W.A.Mozartはワルターの友人で、ワルターのピアノを愛用しています。今日、この時期のFortepianoを再製作する楽器は、シュタインとワルターの楽器をモデルとしています。今でもウィーンの国立歌劇場(Wien Staatsoper)で、Mozartのオペラを上演する時に、Rectativoの伴奏では、チェンバロのように聞こえる、Mozartの時代に使われていたFortepianoの音を聞くことが出来ます。

英国のZumpe

英国では、ドイツから移住したヨハン・クリストフ・ツンペ (Johann Christoph Zumpe, 1726 – 1790)が、英国のチェンバロ製作者のバーカット・シュディ (Burkat Shudi, 1702 – 1773) の元で働いた後、1760年代中期から多くの安価なスクエア・ピアノを製作しています。J.S.Bachの末子、Johann Christian Bach (1735 – 1782)がこの楽器を愛用しています。

現代のピアノ(Modern Piano)への発展

1750年頃、産業革命で正確な鋳造が可能になり、ピアノに鉄製の枠(フレーム)や板(プレート)と、高品質な弦を使うことが可能になります。多くの音楽家からの要求に応え、音色と響きを改良し、音域と音量を拡げることが可能になります。

Shudi / Broadwood社による英国方式

ジョン・ブロードウッド (John Broadwood, 1732 – 1812)は、師匠のシュディと共に、ツンペ のハンマー機構を改良し、**英国方式** (English grand action) を作り上げます。ウィーン方式よりも強い響きを実現しています。代わりに、鍵盤の深い押し込みが必要で、反応は遅くなります。

ジョン・ブロードウッドはシュディ親方の娘バーバラ(Barbara Shudi)と1769年に結婚し、シュディの工房を引き継ぎ、Broadwood 社と改名します。1795年にJohn Broadwood & Sonに社名を変更し、ピアノの技術革新に大きく貢献し、今日まで続いています。

Mozart時代の5オクターヴを初めて越える音域のピアノを製作しています。1790年代には5オクターヴと5度、1810年には6オクターヴの楽器を作っています。音域を拡げ、音量を大きくするために、楽器は大型化します。1818年、ウィーンのBeethovenに楽器を贈り、Beethovenも後期の作品で拡張した音域を活用し、この楽器を愛用しています。

ウィーンのStein / Streicher

ウィーンでは、シュタインの娘ナネット(Nannette Streicher 旧姓(Stein), 1769 – 1833)がピアノ事業を引き継ぎ、夫のJohann Andreas Streicherと共に発展させています。ナネットは、ピアノ事業の傍ら、晩年のBeethovenの世話をしています。Beethovenの元にはStreicherのピアノも加わっています。

19世紀初期には、ウィーンのシュタインでも頑丈で音域の広い楽器を作るようになり、Johannes BrahmsもStreicherのピアノを愛用するようになります。

Conrad Graf による大量生産

また、ウィーンのピアノ製作者コンラート・グラフ (Conrad Graf, 1782–1851)は、1826年までにピアノの製作を工房から大量生産化します。生涯に3000台を越えるピアノを生産し、価格を下げ普及させています。グラフは、Beethovenの最後のピアノを作り、Chopin, Mendelssohn, Schumann夫婦も使っています。

現代のピアノの音色は、鉄製のプレートで弦を張る力が合計20トンを越える強度によって実現されています。1821年、Broadwood社の技術者サミュエル・ハーヴェ (Samuel Hervé)が考案した、弦を支えるピンを打ち込む金属製のプレートの技術が基礎になっています。

金属製のフレームとプレート

また、弦を叩くハンマーは、革製からフェルト製に変わります。1826年にフランスのプレイエル(Pleyel)工房のジャン＝アンリ・パップJean-Henri Pape, 1789 – 1875)が、音質、音量を改良するために考案します。

そして、ダンパーペダルが全体の弦に響き止め(ダンパー)を動作させるのに対し、押している鍵盤の弦の響き止め「だけ」を動作させる、3本ペダル中央のソステヌート・ペダルは、1844年にジャン・ルイ・ボワスロー(Jean-Louis Boisselot) が考案し、1874年にスタインウェイ(Steinway & Sons)社が改良しています。この他にも、F.Liszの要求に応える等、実に多くの改良を経て、現代のピアノに至っています。また、今は普通になっている黒い塗装のピアノは日本から広まり、木目を選ばない為、楽器の価格を下げています。

現在、既にBeethoven, Schumann, Brahmsらの弾いていたピアノの音を再現する試みや、当時のピアノ音楽を見直す機会や音源も増えています。

「ブラームスと箏の調べ」

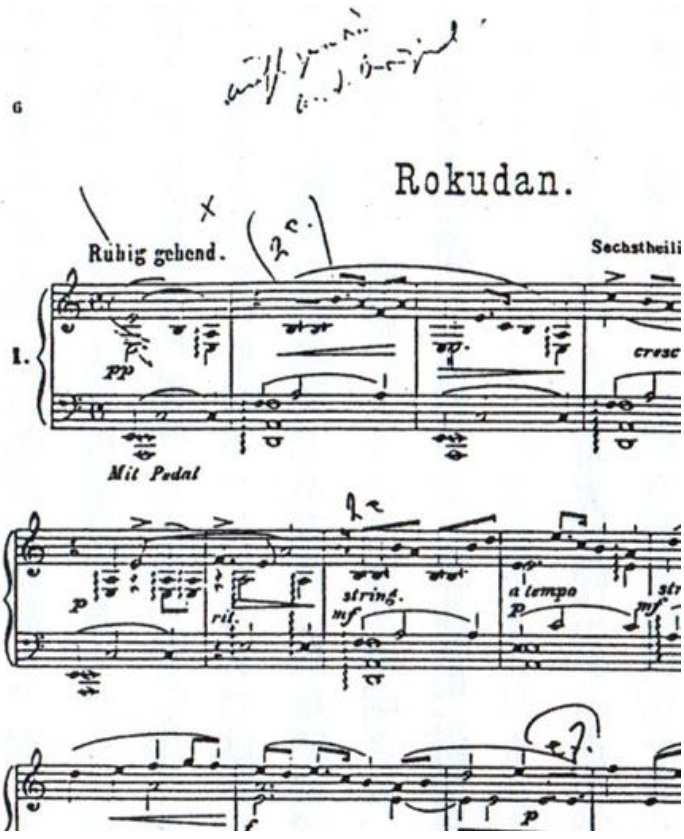
会員　小野 宏子

会報で連載されている高橋善彦氏の「クラシック音楽の楽しみ方」を拝読するのを楽しみにしている私ですが、先日会員の方から好きな作曲家にまつわるエッセイを書いてみてはと声を掛けられました。専門的な事は高橋氏にお任せすることにして、私が大好きなブラームスに関する思いを寄稿させていただく事にしました。

それは私が二十歳前後の頃に遡ります。当時ドイツ留学から帰国したばかりの声楽家で奥田智恵子氏のレッスンを受けた頃に始まりました。それを切っ掛けにドイツロマン派の作曲家たちの作品を多く歌い、聴くようになり、その中でもとりわけブラームスの作品に心を惹かれ関心が高まっていきました。ある時期は「ブラームス協会」に入会し諸先生方から多くのことを学びました。彼の容姿は写真に残るそのままですが、彼はどんな声だったのだろうか？等々興味は尽きませんでした。

紙面が限られているので、ここで本題のブラームスが日本民謡とどのように係ったのかを綴ってみたいと思います。

今から十五年以上も前のことになりますが、当時サントリーホール(小)でブラームス関連の展覧会が開催されました。それはウィーン楽友協会アルヒーフで開催された展覧会と同じテーマのものでした。早速足を運びました。まず目に飛び込んできたのはブラームスが箏の演奏を聴いている様子を描いた大きな屏風絵でした。



ブラームスの書き込みのある六段(Rokudan)の楽譜
[ウィーン楽友協会所蔵]

描いた画家は大垣出身の日本画家守屋多々志(1912-2003)でした。勿論それは図版のパネルであることは理解しましたが、それを見た時の私の驚きと感動は例えようのないものでした。箏を奏している婦人は後ろ姿でしたが「なんと背中の美しい人なのだろう！！」奏している人物は一体誰なのか、日本人であることは必然としても諸々興味はつきません。それにしてもブラームスがペンを片手に譜面を見ている・・・箏に五線譜があろう筈もなく、のめり込んで調べているうちに色々明らかになってきました。まずは箏を奏でる人の名前は戸田極子(父は岩倉具視)、つまり大垣藩主である戸田氏共に嫁ぎ、後に特命全権公使としてウィーンに滞在した夫と共に外交の発展に力を尽くした女性であることが分かりました。夫妻は公使館でしばしばパーティーを催し、箏の達人であった極子が演奏を披露していたようです。

戸田家には音楽教師として係ったピアニストで作曲家でもあったハインリヒ・フォン・ボクレットによって箏の演奏は五線譜に採譜され「六段の調べ」を含め5曲まとめ「Japanische Volksmusik」(日本民謡集)というタイトルで出版されました。ブラームスも献本

戸田 極子
1890年(明治23)

を受けた一人でしたが「戸田公使夫人の箏の演奏を聴きたい」というブラームスの所望を叶えるべく、ボクレットは彼を伴い、公使館での極子の演奏を聴く機会を得るようにしました。まさにこの屏風絵です。ブラームスは譜面を眺めながら書き込みをしているのは「六段の調べ」のようです。どうやらボクレットの採譜の誤りを直している様子がうかがえて興味をそそります。これらのエピソードは、後に当時の大垣市長からの依頼で守屋多々志画伯が1992年にこの屏風絵を描きました。

ブラームスが存命中に実際に日本民謡集が出版され、彼が手に取っていたことなど想像するだけでわくわくします。そして、より彼を身近に感じられてきます。屏風絵は大垣市守屋多々志美術館に収蔵されていますが私はまだ訪ねたことがなく、これまでに屏風絵の展示期間に出かけるチャンスを失ったままなので、コロナ禍が収束したら是非訪れてみたいと思っています。美術館の所蔵品は作品保護のため常設展示はしていないので屏風絵の展示日時などは美術館に問い合わせる必要があります。ご興味のある方は是非訪ねてみることをお勧めします。

小野 宏子氏
バーデンバーデンの郊外リヒテンタールにある、ブラームスが通った食事処のスタムティシュにて

参考文献：
「ウィーンに六段の調べ」萩谷由喜子 中央公論新社

♪ ♪

劇 場 便 り 28

ブレーマーハーフェン　志賀 トニオ

劇場便りは現在3か月毎に執筆しており、必然的に今現在進行中の話題を採り上げる事が主となり、執筆直後の活動の紹介は手薄となってしまうのですが、今回は前回の便り直後の11月下旬に予想だにしない出来事があったのでお伝えしたいと思います。

その時突然音楽監督さんから電話がありました。アドヴェントコンサートを担当予定であったカペルマイスターの方の奥様がコロナに感染し、濃厚接触者の彼が2週間の自宅隔離になった為、私が代理で指揮をしてくれないかという依頼でした。電話があったのが火曜日の夕方で、2日後の木曜日からオーケストラとの稽古開始、日曜日に本番という急な話でした。私は例年アドヴェントコンサートではオルガンとチェレスタを担当しており、今回もその為の準備をしていました。オルガンとチェレスタが使用される演目はプログラム全体の半分程度でしたが、それでも既に音楽の中身をある程度把握していて、例年のコンサートの雰囲気を知っている私をカペルマイスターの方が推薦してくれてたそうです。こんなチャンスは滅多にありませんから、難しい作業になるのを承知で快諾しました。早速カペルマイスターの方の自宅にスコアを受け取りに行き、今度は自分がコロナに感染するわけにはいかないので、万全の感染対策をして帰宅した後、早速読み込み開始！

アドヴェントコンサートと聞くと、讃美歌やジングルベルといったクリスマスソングの演奏をイメージするのですが、ブレーマーハーフェン歌劇場では数年前から出来るだけ多くの観客のニーズに応える為に、バラエティーに富んだプログラムを組むようになりました。今回のプログラムは主に、クリスマスソング、バロック及びシンフォニックな作品の３つのカテゴリーにより成り立っていました。

一つ目のクリスマスソングからは、讃美歌の”もろびとこぞりて”や“ジングルベル”等をシンフォニックにアレンジした曲(4曲)と、子供の合唱が讃美歌をオーケストラの伴奏で歌う曲(6曲)がありました。二つ目のバロックからは、スタンダードであるバッハのクリスマスオラトリオやヘンデルのメサイアからの抜粋に加え、ヴィヴァルディ、ハイドン及びプレトリウスのマイナーな作品が採り上げられていました(11曲)。ヴィヴァルディは3楽章から成る

重奏協奏曲で、今回はトランペットとヴァイオリンによって演奏され、とても内容の濃い作品でした。

３つ目のシンフォニックな作品ではまずプッチーニ作曲の “Sogno d’or”。子守歌であり、４分程ですがとてもロマンチックで綺麗な作品です。そして最後の締めはジョンウィリアムスから“Star of Bethlehem” と “Merry Christmas”。彼らしいアメリカンでゴージャスな響きがありますがやはり難曲です。アンコールは讃美歌と毎年恒例となっている北ドイツ訛り(plattdeutsch)の歌。全ての曲数はなんと26曲ありました！特にバロックの作品はごまかしのきかない難曲揃い。二日間集中して勉強し、なんとか1回目のオーケストラの稽古を終了。その後5人いるソロ歌手達や合唱団ともピアノで音楽稽古をし、少しづつ進むべき方向性が見えてきました。合唱監督は私の代わりにオルガンとチェレスタを弾く事になったので、その打ち合わせもする事ができました。

オーケストラとの3回目の稽古はHaupt Probe (略称HP)と呼ばれる一回目の通し稽古なのですが、他のプロダクションとの兼ね合いで本番の舞台が使えず、オーケストラの稽古場で行われる事になっていました。しかし、その稽古場は狭く、コロナの感染対策の為に義務付けられていた歌手との距離を保つ事が出来なかった為に、歌手無しで稽古する事に。せめてソロ歌手達とは一度オケとの稽古が出来たのですが、合唱団及び、子供の合唱との稽古はゲネプロのみとなってしまいました。そんな折に音楽監督から本番当日に司会をして欲しいとの依頼が。例年指揮しているカペルマイスターの方は数曲毎にマイクを使って楽曲解説等をしていたので、そこまではしなくても、最初と最後の挨拶だけでもして欲しいとの事。大急ぎで挨拶の草稿を完成し、ドイツ語の文法のミス等細部を母にチェックしてもらいました。

そしていよいよ最後の通し稽古General Probe(略称GP)の日。稽古開始前にまずは子供の合唱団と初対面し、ピアノ伴奏で６曲全てを稽古しました。

アドヴェントコンサートでは子供達の合唱がキーポイント。前半と後半3曲づつ歌う彼女達が登場するだけで皆がほっこりするのです。そして、彼女達をいつも指導してる方は実はコロナ感染してしまったカペルマイスターの奥様だったので、彼女達の不安を稽古前に取り除く必要があると感じていました。

そしていよいよGP開始。最初は合唱団との曲だったのですが、ここで問題発生。指揮者を映すモニターが準備されていなかったのです。アドヴェントコンサートでは指揮者を背にして合唱団やソリストが舞台正面に立つ為、指揮者の前方にカメラを設置して２階席手前にある大きなモニターで指揮者を見れるようにする事になっていたのですが、担当の方が忘れてしまったのです。加えて合唱団員達がコロナの感染対策の為の距離の事でもめていた。規則が度々変更されていたので、どの規則が今現在適用されるのかその場でわかる人がいなかったのです。急いでそれぞれ担当の方と連絡し、距離の問題は解決！10分程でカメラは設置されたがモニターはなぜか映らない。。再度担当者に確認すると、必要な機材が一つ足らないとの事。これ以上稽古開始を遅らせるわけにいかないので、15分押しでようやくGP開始。モニターが無いのでお互い背中越しに重要な合図を確認しながら進行し、比較的スムーズに稽古を終了し安堵しました。

ヴィヴァルディの協奏曲はGPを録画し、劇場のホームページにアップする事になっていたので緊張しましたが、こちらもうまくいったようでした。本番は3回予定されており、1回目は当劇場のメインスポンサーであるシュパーカッセ銀行の関係者の貸し切り公演であったのですが、大盛況で終える事が出来、ほっとしました。

„Joy to the World": Tenor Andrew Irwin eröffnete das Adventskonzert mit den Damen des Opernchors.

Von Händel bis Hollywood

Adventskonzert im Stadttheater: Philharmonisches Orchester bietet mit Chören und Solisten viel Barockmusik

Von Sebastian Loskant

BREMERHAVEN. Wenn dieser unerhört grüne Weihnachtsbaum mit der unerhört goldenen Girlande auf dem unerhört roten Untergrund am linken Bühnenrand steht und das Philharmonische Orchester im bläulichen Eisarena-Licht schimmert, dann ist wieder Adventskonzert im Stadttheater. Weil Kapellmeister Hartmut Brüsch erkrankt war, stand diesmal sein Kollege Tonio Shiga am Dirigentenpult.

Er beschränkte seine Moderation darauf, Vorweihnachtserlebnisse seiner Kindheit in Japan zu erzählen, in der es nur einen (leeren) Adventskalender aus Europa für alle gab. Ansonsten konzentrierte er sich auf die Musik: Wenn alle Sänger und Chöre mit dem Rücken zum Dirigenten stehen und manche Musiker über viele Meter hinweg miteinander konzertieren, ist man gut beschäftigt, alle zusammenzuhalten. Shiga hatte das schnell im Griff, von Lied zu Lied wurde es heimeliger.

Der Opernchor sang sich mit zwei Klassikern von Arthur Harris die Kehlen frei. Dass mit Tenor Andrew Irwin ein Muttersprachler für „Joy to the World" und „Jingle Bells" antrat, war angenehm zu hören.

Technisch etwas schwerer tat sich der kluge Gestalter, vom Timbre ganz englischer Oratorientenor, beim Rezitativ zur Eingangsarie aus Händels „Messias".

Im Reigen der Adventsklänge fanden alle Hörer ihre Lieblingsmusik. Der Kinder- und Jugendchor der Musikschule Geestland schmetterte sechs traditionelle Lieder mitreißend „froh, froh, froh". Sopranistin Signe Heiberg veredelte stimmprächtig Schmachtfetzen von Puccini und Gounod – ein „Ave Maria" mit Sieglinden-Jubel hat schon was.

Das Philharmonische Orchester nahm sich mit hörbarer Freude der barocken und kirchenmusikalischen Beiträge an, die es sonst eher selten spielt. So begleitete es zwei Arien aus Bachs Weihnachtsoratorium historisch bestens informiert, die zweite sogar in Kammerbesetzung. Bariton Marcin Hutek stimmte die Arie „Großer Herr und starker König" kraftvoll an. Altistin Patrizia Häusermann kolorierte die Wiederholung von „Bereite dich, Zion" geschmackvoll aus. Trompeter Krisztian Jambor und Oboist Luc Durand beeindruckten mit glänzenden Instrumentalsoli.

Ähnlich gut gelangen zwei Ausschnitte aus Vivaldis „Gloria": Victoria Kunze und Patrizia Häusermann bilden immer wieder ein herrliches Duo.

Einiges zu entdecken

地元紙の報道記事

SWZ (Singen wir zusammen!) 再開！

いつからでもご参加出来ます

会員　木原 健次郎

SWZでは、ドイツ語歌詞を解釈し歌うだけではなく、その歌にまつわる物語・episodeなどを出来るだけ紹介しております。歌うのは不得手と仰る方でも楽しめますので、是非お気軽にご参加下さい。（お申込みは会報同封の申込み用紙(出席表)又はHPから）。以下は1月SWZでご紹介した “Es waren zwei Königskinder”の例です：

Es waren zwei Königskinder,
die hatten einander so lieb.
Sie konnten zusammen nicht kommen,
das Wasser war viel zu tief,

O, Liebster, könntest du schwimmen?
So schwimm doch herüber zu mir!
Drei Kerzen will ich anzünden,
und die sollen leuchten dir,

この歌は、”Wunderhorn” (ドイツ民謡詩集・少年の魔法の角笛)(1804-1808)に収められている歌ですが、そのもとは、古代ギリシャ伝説を素材に、帝政期ローマの詩人Ovid (Ovidius)が作品化し、更にギリシャの詩人Musaiosが５世紀に “Hero und Leander” という名のVolksballade (物語詩)にした事が起源のようです。そのストーリーは；

時代は明確ではないがギリシャ時代(紀元前)。場所はヘレスポント(小アジアとガリポリ半島の間のダーダネルス海峡)。

深い海 (Dardanelles海峡) を隔てて２つの城が建っていた。Sestos の城に住む、アフロディーテの巫女Hero (王女)と、対岸のAbydosの城に住むLeander (王子)は、手紙をやりとりし、恋に落ちる。Leanderは Heroに会うため海を泳いで渡ろうとし、Heroは、方向を見失わないようにと灯を灯す。親は二人の仲を認めない。ある日の夕方、Leanderが泳いでくるが、不実な修道女が灯を消し、Leanderは溺れる。親が祭礼に出かけたすきにHeroは浜へ。漁師に自分の冠と指輪を差し出し、若者を引き揚げるよう頼む。何度も網が打たれ、ついに溺れ死んだ若者が引き揚げられ、彼女は身を投げ自殺する。

Dardanelles海峡のこのあたりは特に狭く、黒海からエーゲ海への潮の流れの速い場所で、昔から水難事故が多かったのでしょう。

19世紀以来有名になったこの曲はドイツ語だけでなく、欧州各国語で歌われており、又、文学作品も多く派生し、ストーリーも色々なvariationがあるようですが、上記が一般的なストーリーのようです。

SWZでは出来るだけその時期・季節に合った曲を毎回4曲程、選んでご紹介し、歌っています。参加申込をされた方には事前に歌詞を送付しています。因みに月別の実績・現時点での予定は以下の通りです。お気軽にお申込み下さい。

１月：”Sehnsucht nach dem Frühling”
“Es waren zwei Königskinder“
“Patrona Bavariae“　“Herz-Schmerz- Polka“

２月：”Freut euch des Lebens“
“Der treue Husar“
“Mein Herz, das ist ein Bienenhaus“
“Kornblumenblau“　“Rheinische Lieder“

３月：”Der Winter ist vergangen”
“Der Mai ist gekommen”
“Nun will der Lenz uns grüßen“
“Das zerbrochene Ringlein“

(SWZ：木原)

定時総会のご案内

湘南日独協会の第23回、2021年度の定時総会を下記の要領にて開催いたします。より多くの会員の皆様に、ご出席、ご参加頂けるよう、心よりお待ち申し上げます。

第23回 定時総会
日時：2022年 4月24日（日）13:00～14:00
会場：藤沢市鵠沼石上1-1-1 江ノ電第2ビル 7階
電話：0466-26-3028

4月例会のご案内

日 時：2022年 4月24日（日）15:00～17:00
演題：「ドイツと日本の絆」
講師：Dr.フィーツェ（ドイツ大使館主席公使）
会場：上記定時総会と同じ会場です。
会費：1,000円

5月例会のご案内

日 時：2022年 5月22日（日）14:30～16:30
演題 「第一次世界大戦を振り返り、現代を考える」
講師：木原 健次郎氏　（湘南日独協会会員）
会場：藤沢市鵠沼石上1-1-1 江ノ電第2ビル 7階
会費：1,000円

ご出席の申し込みは、同封の出席表にご記入頂き、アンケートへのご回答と共に郵送をお願いします。

☆　☆　☆　☆　☆

ドイツ語講座のご案内　2022年 春夏期(4月～9月)

ドイツ語講座では、新型コロナウィルスの感染状況を鑑み、オンライン講座としています。

ドイツ語講座は、「初級」「中級」「上級」の3クラスです。講師は日本人講師とドイツ人講師が隔週で担当します。

詳しくは、同封のチラシ、講座概要をご覧下さい。ホームページでも公開しています。

定員になり次第、申し込みの受付は停止致します、早めの受講の申込みをお願いします。

ドイツ語受付担当　中村 茂子
電話：0467-43-2683
Mail：natalie@jcom.zaq.ne.jp

新入会員のご紹介（敬称略）

石井　明　　齋藤　和夫

ご寄付への御礼

昨年10月以降、現在まで次の方々よりご寄付を頂きました。御礼申し上げます。金額と敬称は省略させて頂きます。

松野美 智子　　西山 忠壬　　高橋 善彦

年会費の納入のお願い

2022年(令和4年)度の会費納入をお願い致します。また、ご寄付にもご協力頂けるようお願い致します。

振込用紙は同封しておりますので、4月末を目途に、お振り込みください。お振り込み頂く際に、お名前の記入をお忘れなきようにご注意ください。

アンケート回答へのご協力のお願い

湘南日独協会では例会を初め色々な活動を行っていますが、皆さまにより楽しんで頂けるよう、会員の皆様の御興味・御希望を知り、又、コロナ禍が今後も続いた場合、活動はどうあるべきか等、検討の参考と致したく、添付のようなアンケートを実施する事になりました。是非、忌憚のないご意見をお願い致します。

編集後記

○新型コロナの感染状況が好転しないまま今年度が終わろうとしています。私たちの活動も計画通りには進みませんでしたが、後半にはオクトーバーフェストに代わる「秋のミニコンサート」を開催し、音楽家の皆さん、合唱団アムゼルそして会員の皆さんの参加を得て、大変楽しい一時を楽しみ事が出来ました。このような、状況にあった対応がこれからも出来ることを期待しています。

○４月からの新年度にも、会報Der Windは６月より４半期ごとの発行を予定しています。今回のアンケート実施により、皆さんのご希望にそえる会報をお届けしたいと考えていますのどうぞご協力をお願いいたします。（大久保）